

飯島 渉著

『ペストと近代中国
——衛生の「制度化」と社会変容——』

研文出版 2000年 380+42ページ

おお き あきら
大 木 昌

はじめに——本書の構成と性格——

本書は、19世紀末から1930年代までの中国における、ペストを中心とした伝染病の流行を実証的に明らかにし、それが近代中国の国家建設にどのような意味をもったかを分析した歴史研究である。評者自身は中国史の専門家ではないので、これまでの中国史研究において本書がどのような意味をもつのか、近代中国の理解にどのような新しい見方を示したのか、使用した資料は適切かどうか、あるいは新しい資料の発掘があったのかなど、通常の書評がふれるべき問題を評価する立場にはない。これらの問題をふくめた本格的な書評は、中国史の専門家によって書かれるべきだろう。本書の内容に立ち入る前に、全体の構成を示しておこう。

序 章 伝染病・衛生・国家

第1章 腺ペストの世界化——19世紀末から20世紀初頭——

第2章 腺ペストの流行と衛生の政治化

第3章 日本の台湾統治と腺ペスト・マラリア

第4章 満州における肺ペストの流行——1910年から1911年——

第5章 肺ペストの流行と衛生の政治化——1910年から1911年——

第6章 民国初期における衛生の「制度化」——中央防疫処を中心として——

第7章 1919年のコレラ流行

第8章 衛生の「制度化」と国際的契機——シンガポール伝染病情報局の設立——

第9章 衛生の「制度化」と検疫権の回収

補 論 近代東アジアにおける伝染病の流行

終 章 近代中国における衛生の「制度化」と社会変容

本書は、まず序章においてその目的や著者のねらいを示し、第1章から第9章までと補論で、上記の目的やねらいを具体的な事例をとおして実証するという構成になっている。そして、終章は、本書の副題と同じタイトルが付されており、いわば本書の結論部分に相当するが、分量も少なく、ごく簡単なまとめといった内容である。なお、これらの章立ての中で「補論」は「章」という言葉が付いていないことからわかるように、序章から終章までの内容とはやや異なっている。つまり、「補論」では中国、朝鮮、南樺太、日本などの近代東アジアと南洋諸島における伝染病（ペスト、コレラ、天然痘、ジフテリア、赤痢、腸チフス）の発生状況を、統計、図表、グラフを用いて客観的に示すことが主な目的で、とくに近代化や国家建設の問題との関連で議論をしているわけではない。

I 方法論的特徴

本書のねらいは、中国の近代化あるいは近代中国の国家建設を、伝染病、とりわけペストの流行とそれに対する中国社会の対応をとおして検討することにある。この際著者は、ペストの流行を契機として進展した、国家による衛生事業の直接的な管理・運営——著者の表現では「制度化」——を重視している。著者によれば、これまでの近代中国の歴史研究において、このようなアプローチはなかったと言う。近代中国の研究史的な評価について評者はコメントする立場にないが、著者が以上のような視点から近代中国の歴史を検討しようとした背景には、相互に密接に関連した3つの問題意識があったように思われる。

ひとつめは、近代中国の歴史研究をする場合の、基本的な枠組みに関する著者の問題提起である。近年の研究状況は、近代中国の歴史を「西欧（あるい

は日本)の衝撃」の変数として理解するのではなく、中国社会の歴史的構造に眼を向け、いわば「歴史の断絶性」よりも「歴史の連続性」に注目する傾向にある。これは、「変わらぬ中国社会」を重視し、「中国自身に即したアプローチ」(China-centered approach)という研究動向を反映している。これに対して著者は、「歴史の連続性」に注目することは、中国社会の特徴を理解するために有効な視角であることは認めながらも、20世紀の中国社会という時間軸を設定して中国の国家、人々の意識、社会生活のありかたをみると、広い意味での社会制度、社会構造の変化は、諸外国に比べてむしろ大きかったのではないかと考えている。

なお、評者の研究分野である東南アジア史研究においても、1960年代から70年代にかけてのアメリカで、「歴史の連続性」、「自律的歴史」(autonomous history)、「内側からの歴史」(history “from within”)といったアプローチの必要性が強調され、これは70年代から80年代の日本における研究状況にも大きな影響を与えた。この傾向はヨーロッパ中心主義、外部の影響を強調しすぎる歴史観に対する批判としての意義はあった。しかし、今日の東南アジア史研究においては、自律史観も、変化と連続の双方が重要であることも多くの研究者が共有する認識となっており、あえて議論されることはあまりない。評者にとってむしろ意外だったのは、最近になって中国社会の連続性が強調されるようになったことである。なぜなら、外部からの衝撃にもかかわらず、中国は連綿と続く独自の文化と歴史を歩んできたと考えられがちだからである。

2つめは、上に述べたことに関連しているのだが、社会史に対する著者の問題提起である。社会史は、国家や権力構造などを背後においやってしまい、人々の生活の有様、非制度的な民間社会の解明に主眼をおく。著者はこのような立場を否定するわけではないが、社会史研究によって明らかにされた事実が、近代中国の歴史においてどのような意味をもつか必ずしも明確でないことに不満をいっている。このため著者は、近代中国で生じたさまざまな事実を、もう一度国家や権力構造といった広い意味での社会

制度の変容にたちかえって検討することを提唱している。著者の言葉を借りると、本書は「政治史の復権」を目指しているのである。これは、社会史に対する間接的な批判にもなっている。たしかに、伝染病や病の問題は社会史の格好のテーマであるので、著者が言うように、この問題に関するかぎり社会史研究が目につくかもしれない。しかし評者には、現在でも歴史研究全体を見渡したとき、その主流は依然として政治と経済、つまり権力と富をめぐる歴史である。

3つめは、近代中国が直面した近代世界あるいは近代性とはどのようなものであったのか、という問題である。これは、すでにふれた近代中国の変化の問題とも関連している。中国史において近代化と表現される内容は、封建的遺制と欧米や日本の帝国主義的な進出からの解放、そして工業化を意味することが多かった。これに対して著者は、近代世界は、それ以前に比べればよほど均質性、同時性をもった時代であったとし、こうした均質性、同時性を支えたさまざまな制度を「近代性の構造」と表現している。ここで、これらの制度とは、西欧においてつくられたもの(政治や経済だけでなく、教育、医療、衛生などをふくむ制度)を指す。つまり、西欧で生まれた近代性は、植民地においても強制され、それ以外の非西欧世界にも影響を与えたために、広く世界に同時性と均質性をもたらしたのである。著者が中国について近代性の指標としているのは「制度化」された統治形態をもつ近代的な立憲国家の建設である。これは、近代中国が目指した近代性を「解放と工業化」としてとらえる見方とかなり大きな違いである。

II 医療・衛生と国家

ところで、本書は近代中国の国家建設の問題を、医療と衛生、とくに衛生の「制度化」という観点から検討している。それは次のような理由による。まず、欧米や日本は、徴税の対価として教育、医療、衛生、救貧などを「制度化」し、国家の役割を肥大させながら統治行為としてそれらを整備してきた。

これらのうち、医療と衛生は、その運営に国家が最も積極的に介入した領域であり、衛生事業は国家と個人とを結びつけ、社会の組織化や「身体の規律化」などの統治機構を再編する回路となった。医療・保健の問題は、個人の命にかかわるだけに、植民地権力であれ自国の政府であれ、制度の強制や介入に対して正当性を主張しやすい。医療・衛生の「制度化」にともなう統治機構の再編は、19世紀末の腺ペストをはじめさまざまな伝染病の世界的な流行を契機に必要に迫られ、徐々に中国にも浸透し始めたのである。

次に、衛生の「制度化」は、中国の対外関係においても非常に重要な問題をふくんでいた。まず、中国にいた外国勢力は、支配地域や自らが住む租界だけでなく周辺地域の衛生や伝染病対策にも、西欧の公衆衛生を直接・間接におしつけた。これは、中国側から見れば明らかな内政干渉である。他方、中国の外国船に対する検疫権は関税自主権と同様、主権国家として当然の権利であり、これが行使できるかどうかは国家としての真価を問われる問題である。清朝政府と1920年代以降の民国政府は、一方で西欧の衛生事業やそのシステムを採用して外国からの内政干渉を防ぎ、他方で外国船に対する検疫権を取り戻す（著者の言葉では検疫権の回収）努力をした。こうした動きは、外国勢力による「身体の植民地化」に対抗し、「民族の防衛」を目指した中国側の国権回復、衛生救国という民族主義的な動きと連動していた。この意味で、中国側の医療・衛生の「制度化」は非常に政治的であったと言える。

以上の過程で、中国社会は西欧医学、西欧の衛生思想、それらに基づく衛生事業（水道、消毒、清掃、種痘、予防接種、戸口調査、性病対策など）を積極的に受け入れた。20世紀初頭以降、中国政府は、伝統的な中国医学を制限し西洋医学中心に医療行政を推進する政策をとった。一方、制度的には、国家と個人との間でそれまで衛生事業を担ってきた民間団体（同業団体、同郷団体、商会、自治会など）に代わって、国家が直接管理する衛生機構（衛生局、衛生課、中央防疫処など）を設置するなど、統治機構の再編も行った。こうして、中国は近代国家の

建設を推進していったのである。著者は、これらすべてをふくめて、中国社会が直面した近代世界と考えている。

III 評価と展望

全体をとおして、医療・衛生の問題を歴史研究のなかに取り込み、その重要さを正統に評価しようとする本書の意図に評者は賛成である。そして、本書はいくつかの点で近代中国史に新たな領域を提示しているように思える。第1に、病、とりわけ伝染病の歴史は、社会史の分野では珍しいテーマではないし、植民地における「帝国医療」の研究もある程度の研究蓄積はある。しかし、本書のように、医療・衛生の問題を非西欧世界における近代化、さらに国家建設との関連であつかった著作はあまりない。これは本書のすぐれた点である。第2に、19世紀末から1930年代までの中国を中心とした東アジアにおける伝染病の流行状態とそれに対する対応を、統計もふくめてこれほど詳しく説明した著作はほかに類がない。本書のほとんどのページはこうした実証的な部分からなる。この意味で、本書には第一級の資料的価値がある。

第3に、中国と近隣諸地域に広がった伝染病の経路や感染地域の分布から、これら地域における人と物の動きを読み取ることができる。第4に本書は、近代中国の国際関係の実態を伝染病への対応をとおして、具体的に理解することを可能にしてくれる。イギリスの植民地となった香港、ロシアや日本に占領された地区、外国人租界をもつ開港場において、中国の政府、住民、外国勢力がどのような関係にあったのかは、政治・経済的側面をのぞいてはわかりにくい。伝染病への対応をつうじてははっきりと理解できる。これも本書の大きな利点である。第5に、本書は当時の日本が中国、台湾、朝鮮で行った医療・衛生行政にもふれており、これは中国史の研究者だけでなく日本史の研究者にとっても参考になろう。

ところで、本書は近代中国を中心にあつかつてはいるが、19世紀から20世紀初頭に近代に直面したのは中国だけではない。名実ともに植民地化されてし

まったアジア、アフリカ諸国と、植民地化が一部にとどまり自国政府を維持できた中国とは基本的な条件がちがうが、本書は、中国以外の非西欧世界の歴史を考えるうえで、比較のための有効な事例となることは間違いない。なお、評者の個人的な関心からすると、西欧の近代システムに直面した非西欧世界のうち、イスラム世界には、20世紀初頭のトルコのように近代化・西欧化を一気に推し進めた国もあるが、イスラム社会の内側から近代化を成し遂げようとするイスラム近代主義もある。これも、西欧的な近代世界への反発と言えないことはないが、西欧的近代とは異なった道をさぐっている国もある。

本書は医療・衛生を直接の対象とし、記述のほとんどは「言説としての伝染病」ではなく「存在としての伝染病」に向けられている。しかし、著者の最終的な関心は、中国における伝染病への対応、すなわち「制度化」が近代国家の建設にどのように結びついたのかということ、つまり「政治史の復権」にある。やや極端な表現をすると、本書では医療・衛生は国家建設のひとつの回路（手段）としてあつかわれている。しかし、医療・衛生とはそもそも人の命を守ることを目的としている。その観点からすると、政治史的な視点とは全く逆に、国家建設も経済的繁栄も、むしろ命を守るための手段（回路）である、という見方もできる。言い換えると、命を守るために必要な国家や経済システムがどのように再編されてきたか、という発想も考えられるのである。医療・衛生については、こうした社会史的な立場と政治・経済的立場との双方が必要であろう。

医療に関する本書の記述で興味深いのは、中国は近代化の過程で中国医学を抑制し西欧医学の、とりわけ公衆衛生を積極的に採り入れる方向をとったこ

とである。しかし、中国医学の医師からの強い要請で、双方とも認めることにした。日本においても明治の初めに西欧医学と東洋医学（中国医学）のどちらを正統医学とするかの論争があり、結局政府は西欧医学だけを正統医学として認め、東洋医学は国家が認める医療行為から排除されてしまった。この点で、中国の方が日本より柔軟であったと言えよう。おそらく、医療に象徴される西欧文化の受容の仕方は、両国の近代世界に対する態度の違いを反映しているのだろう。

最後に、技術的な問題を2、3示しておきたい。全体の構成のなかで、南洋群島、樺太などの地域をふくむ伝染病の実態が「補論」として「終章」の前におかれている。読む側からすると、本体部分は主題であるペストと近代中国の問題に集中し、そのほかの記述や資料は、もしどうしても示しておきたい場合には、終章のあとに、本来の補論としておいた方が読みやすい。

次に、本書は中国史の専門家の読者を想定して書かれているので、中国史研究者ならば当然説明の必要がない用語については説明がない。たとえば、しばしば登場する「戒克船」については何の説明もない。さらに、中国とは関係ないが、種痘の「善感」（好結果の移植手術や接種）という医学用語についても、簡単な説明をつけたほうが親切である。

本書は、これまでにないユニークな視点から近代中国史の一端を解き明かしている。平易な表現で、専門家以外の研究者にも理解できるように工夫すれば、中国史以外の広範な研究者をも惹きつけ、議論の場を提供することができるのではないだろうか。

(明治学院大学国際学部教授)